13　中国伝統医学と道教（第十九回）

「符」

吉元昭治

符とは、互に確認しあうための「わりふ」、しるしとか記号といった「符号」、あるいは「おふだ」「お守り（護符）」といったなどの意味がある。ここでは最後のものについてのべる。

ポピュラーのものに「交通安全」「学業成就」「受験合格」「安産」「家内安全」「家業繁栄」「病気恢復」「不老長寿」「火の用心（要慎）」などさまざまのものがあり、その符の発行されている神社・仏閣の名称がついている。こうして人々の現世利益のおもいにこの科学先進時代といわれる今でも深くくいこんでいるのである。

符の歴史は古く、すでに中国では、巫師とか方士といわれるものが活躍した原始的な宗教時代に神仙に仮託して、方術的な方法として用い鬼神を招き、悪魔を鎮圧、退散させ、命の保証としていた。初期のものとして残っているのは『太平経』や、『抱朴子』の「老君入山符」などが有名である。

符は主に「紙符」といって紙にかかれ、文字や図が描かれた。「符図」ともいわれるものである。元来、漢字は篆書に見られるように変形し、図形化しやすい一面を持っていたから、文字のもつ霊性、神秘性、魔性、超能力性などを表現しやすかった。従って符はその目的、時代、執筆者、流派によって千差万別であり、それが今まで分類化し、システム化して学術的、研究的に検討しようということがなかった一面でもあった。さらに符は、民間信仰、民間宗教、あるいは民俗的な中にあったから符についての論文発表もそう多くはない。

符は、紙の場合、黄紙に朱砂をもって書かれることが古くからあり、今でも台湾や東南アジアなどの符にこの流れをくんでいるのもある。その他符をかく材料として、木簡、木版、土器などがある。桃板は辟邪用として用いられ、我が国の「蘇民将来符」もそうである。いわゆる「絵馬」もこれに近く木版である。また、符とは、「お守

り」とか「護符」という面と「呪符」という面もあり、前者の「陽符」、後者の「陰符」ともいうこともある。

符はただ書いただけでは何等効力がなく、神仏の前に供えて、呪文をとなえ、神仏の力をそこに封じ込めるのである。「符呪」とい、道教では「符祝」ともいっている。封じこめられた神仏の力は、そこにあるから、我々は、符の封を開いて見るのをためらうという面をもっている。

「お守り」は身に佩びることが多いが、また「鏡宅符」という家内安全の符や、また互の盟約の証として「牛王宝印」符もあった。

また、「替身」といって身代りになってくれる「人形（ひとかた）」もある。自分の体の不調の部位をその人形にかき入れお願いするものである。

安産祈願のため腹帯に「寿」の字を書くのも符と見なされよう。

符でもう一つ特色があるのに、「服符」とか「符水」といわれるものがある。符を焼いてその灰を服用したりそのままのむ方法である。また道士が水の入った器に指をもって祈りながら空（くう）に符をかき、その水を服用する「洗水」というのもある。これで体の中の悪いものを洗い流すというのである。「符水」は、すでに中国東漢末張角がひろめた「太平道」という道教の初まりから、その教団拡張の手段として行われていた。（「教病人叩頭思過、因以符水飲之」）

符については、演者はすでに「道教医学」の三重構造の中で、その第三外層の中にあって他力的な祈り願いにより治病を図る、心理的傾向が強いものであることを発表している。

総会では、符と治病、中国医学との接点についてのべたい。

（順天堂大学医学部産婦人科学教室）